



## せめて光れや稲コシヒカリ

公益財団法人植物調節剤研究協会 理事  
北陸支部長

長澤 裕滋

今年も気象の変動が大きく、局地的・短時間の豪雨が各地で大きな被害をもたらした。また記録的な日照不足もあった。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げるとともに、いつでも・どこでも災害発生の危険があること、日頃からの準備が重要であることに改めて気付かされる。

さて、当支部は新潟県にあるが、新潟と言えばまずコシヒカリに代表される米や日本酒を思い浮かべられると思う。しかし、良質米の生産については決して古い話ではない。それまで米粒が好きな鳥ですら食べない「鳥跨ぎ米」と酷評されていた新潟米が、昭和6年に育成された極早生で短強稈、良食味・高品質な「農林1号」により評価を高まったことから始まっている。

そして昭和31年、未だ多収性が求められていた時代に、全国に先駆けて長程だが良食味・高品質な「越南17号」を「コシヒカリ」と名付け、奨励品種に採用（同年千葉県も）した。長程であることについては、「栽培方法によって克服できる欠陥は、致命的な欠陥に非ず」と時の新潟県農業試験場長が食味・品質を重要視し、強く奨励品種採用を推したという逸話が伝えられている。

このように新品種の登場は大きな要因ではあるが、それとともに水田の環境改善や栽培技術の開発も大きな要因であり、機械移植栽培の急速な普及に伴い、倒伏させず、良食味・高品質米生産のための生産技術開発や普及が強く求められていた。そして何より栽培者の不断の努力が今日の成果として実を結んでいる。

例えば、新潟市近郊は信濃川や阿賀野川等の大きな河川の下流にあたり、大きく肥沃な平野が広がっている。豊富な水や稲作に適した気象条件にも恵まれている。しかし、詳しく見ると幾つかの砂丘列が内陸部分にもあり、それに阻まれて

排水不良な区域では大きな低湿地が生まれていた。中でも市内の亀田郷地域は約100km<sup>2</sup>の輪中地帯で、その3分の2が海面より低く、また信濃川の水面は新潟市の南にある鳥屋野（とやの）潟より高い位置を流れている。以前は沼地のような状態で稲作が行われていたが、巨大な排水施設（親松排水機場は秒速60m<sup>3</sup>）が設置され、乾田化し大型機械化による稲作が可能となった（土地改良については本誌第50巻4号巻頭言「芦沼から美田へ」で種田前支部長が詳しく書かれている）。

さて、元新潟県農業試験場長で当協会でも適1試験や北陸支部長を担当された國武正彦氏がこの春ご逝去された。氏はコシヒカリを中心とした北陸産米の高品質安定栽培技術開発にご尽力されたが、また歌人でもあった。平成6年秋に刊行された新潟県農業試験場百年史の思い出の記に、“歌日記（昭和27～59）から”が寄せられ、

\* 着任、越後風景では

舟に乗り 稲刈りおれる 荒れ空に  
架木の黄葉の 散り舞ひやまぬ  
田の底に 埋めし丸太を 足さぐり  
底なしの田に 長き苗挿す

と詠まれ、

\* コシヒカリ誕生、品種名作案では

木枯らしが 吹けば色なき 越の国  
せめて光れや 稲コシヒカリ

と詠まれている。これから北陸地域では灰色の空が重く低く垂れこめる季節がやってくる。しかし氏が期待を込めたコシヒカリは良食味米として現在でも光輝いている。

これからも迫りくる大きな気象変動に対応できる品種や技術開発がますます期待されている。